未来を生きる子どもたちへのメッセージ　⑲

『横井照子ひなげし美術館』

シルバウィークはどうお過ごしでしたか。今年の連休は長かったですね。私は恵那市の横井照子ひなげし美術館を訪ねました。学芸員の方の解説を聞いた後、横井照子氏の作品の評価について伺いました。「季節感のある抽象画と言われるがその評価は」「書を絵画の中に記されているがスイスやアメリカでの評価は」「音楽的な絵を描く画家と言われるがどんな点か」。横井照子氏については亡くなってから一層評価が高まっているが、それを考えると「季節感を取り入れた抽象画」も「書を絵画の中で書いたこと」も評価されているということでした。また外国の方にとって読めない字というのは、線や点に過ぎないのでないかという話も聞きました。音楽的な絵というのは、モチーフにリズム性があり、楽譜を意識したような仕上がりになっているということでした。「中山道広重美術館」にも立ち寄り、中山道６９次の浮世絵を楽しむことができました。「雪の大井宿」や「郡上・阿弥陀ヶ滝」などに感心させられました。名所を描いた浮世絵の出来の素晴らしさ、ヨーロッパの芸術に大きな影響を与えたジャポニズムに驚かされました。

「先生は歴史が好きと聞きますが、ご専門は何ですか」と聞かれることがあります。７月・９月に「学校の歴史」というテーマで津島市と弥富市でお話をさせていただきました。「江戸時代の寺子屋と明治の初めの小学校との連続と断絶」について調べています。寺子屋が近代の学校にどのような影響を与えたかということに関心を持っています。例えば明治となり小学校制度があっという間に出来上がったのは、寺子屋の師匠がおり、寺子屋という場所があり、寺子屋の教科書や教え方があったからではないか。これが近代の学校の訓導（先生）となり、新たな学校という場で、子どもたちに教育を行ったからでないかと思うのです。実際に蟹江の小学校では寺子屋の学習記録をそのまま引き継ぎ、その記録をもとに学習を始めたという文書が出ています。また寺子屋のあった場所やその近くで明治の小学校が始まっていることに気づきました。この研究は明治維新というのはどんな改革であったのかということを考える事になります。

毎日時間をつくっては、１５分～３０分読書を楽しんでいます。今月は７年前にテレビで放映された「みかづき」を読みました。塾経営に情熱を燃やしたご夫婦の物語。森絵都氏の長編小説。戦後教育の課題（弱点）について一石を投じた作品です。まさに寺子屋のような補習塾のあり方、少人数の子どもたちに対応する教育のあり方、子どもたちに自信を与える褒める教育が理想。その教育をめぐり、登場人物のファミリーの心の葛藤が上手く描かれています。

令和８年１０月１日

津島市教育委員会

教育長　浅井厚視

未来を生きる子どもたちへのメッセージ　⑱

『大河ドラマ館　豊臣兄弟』

中村公園の大河ドラマ館に行ってきました。ＮＨＫ「豊臣兄弟」の番組のための歴史館です。中村公園の辺りは豊臣秀吉・弟の秀長、秀吉のファミリー、家臣の加藤清正の出身地でもあります。テレビの場面でも中村の農村風景が何回も出ていました。秀吉のサクセスストリーを家族の視点から考えた番組というのは、新しい試みです。なか（秀吉の母・大政所）、寧々（秀吉の妻・北政所）、智（秀吉の姉・関白秀次の母）、朝日（秀吉の妹・家康の妻）、慶（秀長の妻）と戦国の女性像をコミカルに楽しく、力強く描いています。日本一の出世人秀吉は津島の堀田家で奉公していたという言い伝えがあり、津島神社の楼門は秀吉が、南門は秀頼が寄進しており、津島とのかかわりが見えてきます。秀吉の家臣、加藤清正は幼少年時代を叔父が住んでいた津島で暮らし、妙延寺の寺子屋に通いました。清正と一緒に賤ヶ岳の戦いで活躍し、七本槍の一人に数えられる平野長泰は津島出身の武将で、後に奈良県の田原本に領地を持ち、幕末まで続きました。大河館には清正も長泰もパネルになっていました。８月７日に行った歴史カード（ハイスト）の講演会では、信長や秀吉、清正や長泰と津島とのかかわりについてお話をしました。

７月に豊橋市美術博物館で松下芝堂先生の展覧会、８月に田原市博物館で鈴木翠軒先生の展覧会が開催されました。松下先生は鈴木翠軒先生の高弟です。鈴木翠軒先生は、愛知県田原市（旧渥美町）の出身で、戦前の習字の国定教科書をお一人で全学年作成した書道界の重鎮です。氏は淡い青墨を使い、細くて自由闊達な線を書きました。まるで絵画のように書かれ、氏の書は翠軒流と呼ばれています。この書を受け継いだのが松下先生です。松下先生は豊橋市前芝で生まれ、人生の大半を津島市で過ごしました。そのため海部津島に翠軒流が広がり、松下先生のお弟子さんや教え子を輩出しました。先生の字は翠軒先生の字よりもデフォルメされて、細く美しい線が伸びます。「我、線の行者足らん」とおっしゃったそうです。展覧会では青墨の美しさを感じることができました。

今年の夏休みは久しぶりに読書ができました。梅原猛の著作「法然の哀しみ」と「歓喜する円空」を読みました。いずれも長編。小説ではなく歴史書（歴史哲学？）です。「法然の前の仏教はすべて法然に流れ込み、法然の後の仏教は法然から出ていく」この言葉を少しだけ理解できたように思います。円空については、津島に千体地蔵をはじめ何点か仏像が残っていますが、なぜ仏像を造りはじめたか考えさせられた書籍です。皆さんはどんな本を読まれましたか。

猛暑日や話題の映画二度見する

令和８年９月１日

津島市教育委員会

教育長　浅井厚視

未来を生きる子どもたちへのメッセージ　⑰

『私はないものを数えない』

夏休み、市内の小中学校の校長先生・教頭先生と面談をしました。２４人の皆さんに、夏休みに１冊本を読んで下さいという宿題を出しました。いつも職場の先生や学校の子どもたちに宿題を出している人に逆に宿題を出すというのは失礼と思いましたが、先生方（特に管理職）こそ本に親しんでほしいと思ったからです。私も８月の中旬に行われる教育講演会の講師の方の書籍「私はないものを数えない」をまず読んでみました。事故で両足を失い、車椅子ユーザーとなった葦原海氏の本。海さんはミラノコレクションやパリコレクションで車椅子モデルとして活躍、東京パラリンピックの開会式パフォーマーも務めました。とにかく明るく、ポジティブなエッセイです。作品はＳＮＳのブログを読んでいるようにさっと読めます。人は誰も違った境遇で生きています。少しだけ不都合があるかもしれませんが、お互いの境遇を理解し合いたいと思いました。

今年の７月は晴天に恵まれる朝が多く、夏の巡回ラジオ体操が行われています。私もウィークデーは天王川公園で、土曜日は神守小の体操会に参加しました。沢山の方が参加してみえます。200 人をこえる日もあり、ラジオ体操が私たちの生活に根づいていることを実感します。体が覚えているのか、放送が始まると自然と身体が動きます。汗をかいて一日が始まるのは気持ちがよいです。今年は行進しながら、ラジオ体操の歌も歌っています。そういえば昨年の 11 月中国の杭州や上海で同じ光景を見ました。朝、街中を散歩していると公園で太極拳をしている人たちと出会いました。音楽に合わせて様々なポーズをとっていました。健康に気をつけ、朝から身体を動かしているのは同じだと思いました。皆さんは夏休み、健康に気をつけていることを何かしていますか。

今年も尾張津島天王祭の朝祭に参加しました。供奉人として津島神社の神輿の御供をさせていただきました。天王川公園の堤から北側の坂を降り、津島神社の参詣道を歩きます。私は裃袴姿の武士ですが、神官、貴族の衣冠束帯や町人・家人の姿、さながら時代絵巻の格好で歩きます。一番暑い時間帯に奏楽が流れる中、ゆっくり歩きました。それぞれの車（米・堤下・今市場・筏場・下、市江）の年寄、祝司や稚児と一緒に津島神社へ向かいました。内陣で子どもたちの奏楽の演奏を聞きました。小さな稚児たちが暑さを我慢して立派に祭りの主役を務めていました。激しい蝉時雨と重なりました。

夏風や車楽舟に飾り替え

令和８年８月１日

津島市教育委員会

教育長　浅井厚視

未来を生きる子どもたちへのメッセージ　⑭

『博物館の二つの企画展』

以前にも書きましたが、私は清須市にある「あいち朝日遺跡ミュージアム」に定期的に通っています。企画展が替わるたびに見学に行きます。前回は「愛知の発掘調査 2025」を見てきました。尾張部（名古屋市）の弥生時代の住居（掘立柱建物）や墓（方形周溝墓）の様子、そこから出土した円窓付土器をはじめとした土器、三河部の前方後円墳とその石室の調査を知りました。今回の企画展は「一宮市萩原遺跡群」が６月 21 日まで展示されています。その中には、愛知県の発掘調査区で見つかった朝日銅鐸（清須市）と八王子銅鐸（一宮市）を見ることができ、銅鐸の音色と合わせて、弥生時代のワンターランドに入ります。出土状況がはっきり分かる珍しい銅鐸です。銅鐸が見つかった状況（逆さであったり、寝かせてあったり）の解説もありました。八王子銅鐸の見つかった日、私はその発掘現場、すぐ近くでトランシット（測量器）を立てていました。また銅鐸の取り上げをした時にはビデオカメラ係を務めました。東海地方の特色となっている紅殻を使った赤色の美しい土器（パレス土器）も一度見てほしいと思います。

もう一つは名古屋市の徳川美術館で行われている「豊臣兄弟！」の企画展です。今年のＮＨＫ大河ドラマに係る特別展で大変人気を集めています。信長・秀吉・家康の三英傑に加え、史上最高の補佐役（ナンバー２）豊臣秀長について展示が行われています。津島神社の楼門は秀吉が、南門は秀頼が寄進し、秀吉は尾張津島天王祭をこよなく愛し、大坂に移そうとしていたと言われています。そんな津島と深い関わりのある人たちの企画展です。三人の肖像画や書状、秀長愛用の茶入や兜を見てほしいと思います。調整型で人の話をよく聞いたと言われる秀長の人となりに関心をもって下さい。津島は信長・秀吉の家臣として活躍した津島衆がおり、賤ヶ岳の七本槍の加藤清正や平野長泰のように津島にエピソードを残す武将もいます。常設展では、徳川美術館には多くの合戦図屏風や刀、兜、鉄砲もあり、戦国時代の戦いの雰囲気を味わうこともできます。自分の人生の中で徳川美術館の講堂で「郷土愛はふるさと検定から」という講演をしたことが大きな自慢となっています。美術館の講師専用入口から入れて頂きました。

この二つの企画展、博物館を５月・６月に訪ねていただきたいと思います。さらに全国にあるお城や城館を訪ね、兵どもの戦さのあとに関心をもっていただきたいと思います。私も御朱印に合わせ御城印も始めたところです。

令和８年５月１日
津島市教育委員会
教育長　浅井厚視